

研究ノート

原始仏典に見る人間観Ⅱ

—チャラカ・サンヒターの人間観との比較研究—

長友泰潤

南九州大学 教養・教職センター 哲学研究室

2014年10月1日受付; 2015年1月29日受理

The description of the exemplary people of the Sutta-Nipāta: Compared with the good life and the ideal doctor in Carakasamhitā

Taijun Nagatomo

Laboratory of philosophy, Minamikyusyu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 1, 2014; Accepted January 29, 2015

In the description of the exemplary people of the Sutta-Nipāta, those who have the knowledge, obey the law and the teachings of the scripture leave the falsehood and the arrogance are the good people.

In the description of the good life and the good doctor of the Carakasamhitā, those who are not afflicted with physical and mental ailments, who are endowed with youth, enthusiasm, strength, reputation, manliness, boldness, knowledge of arts and sciences, senses, objects of senses, ability of the sense organs, riches and various luxurious articles for enjoyment, who achieve whatever they want and move as they like, lead a happy life; others lead an unhappy life. Those who are the well-wishers of all creatures, who are truthful, peace loving, who examine things before acting upon them, who are vigilant, who serve the elders, who have full control over passion, anger, envy, pride and prestige, who are constantly given to various types of charity, meditation, acquisition of knowledge and quite life, who have full knowledge of the spiritual power and are devoted to it, lead a useful life, others do not. And one should serve the good doctor who are full of tranquility and have the knowledge of arts and sciences of the profession.

According to the above investigation, it can be maintained that there is a similarity between the view of the good life and the good doctor of the Carakasamhitā and the exemplary people of the Sutta-Nipāta.

Key words: Sutta-Nipāta, Carakasamhitā.

序

原始仏典であるスッタニパータ (Sutta-Nipāta, 以下 SN)^{註1)}には、修行者のあるべき姿やバラモンのあり方が書かれており、その人間観を知ることができる。既に、チャラカ・サンヒター (Carakasamhitā, 以下 CS)^{註2)}の人間観・医者観をシャンカラのブラフマストラ・バーシュヤやサーンキヤ学派のサーンクヤカーリカーに見られるバラモン観と比較考察し、人間として誠実であること、慈悲深きこと、学問に精通していることなど、バラモンあるべき姿についての共通した考え方が存在

していることがわかった。

また、原始仏典であるディーガニカーヤの人間観の比較検討からも、同様な人間のあるべき姿についての言及がみられた。そこで、ディーガニカーヤの人間観の起源とも言える、SNまでさかのぼり、そこに見られる人間観との比較考察をし、嘘をつかないこと、慈悲深きことなど、共通した人間観があることが明らかとなった。しかし、SNには、まだまだ多くの人間のあるべき姿についての記述が見られる。ここでは、これまでの検討結果を基に、SNの人間観について、より詳細な考察を行っていく。

I. SN に見る人間観

今までのSNについての考察から、その人間観について、以下のことがわかってきている。SNでは、「賤しい人」と題して^{注3)}、人間の怒りや恨み、欲等について説かれている。他人の美德を覆い、誤った見解を奉じ、たくらみのある人や、他人を軽蔑したり、ものおしみをし、恥じ入る心のない人が賤しい人とされる。また、当時の印度社会を反映するような賤しき人について説かれている。すなわち、町を破壊する圧制者、村や林で盗みをする人、道行く人を殺害する物取りが賤しき人とされる。さらに、バラモンやそれ以外の修行者、ブッダやブッダの弟子たちにたいする行為が賤しい人について説かれている。すなわち、それらの修行者に嘘をついたり、罵ったり、そしる人が賤しき人とされる。

また、「慈しみ」と題して^{注4)}、人間の正しい生き方についても説かれている。その中で、慈しみを持つ者として、能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であることや、またその人が、足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であること、他の識者の非難を受けるような下劣な行いは決してしないこと、他人を欺かず、軽んぜず、苦痛を与えないことが挙げられている。バラモンが生まれによってではなく、行為によってバラモンであるというブッダの言葉が示されている。

1. 「破滅」と題する教説

これらの教説に加えて、さらに、SNでは「破滅」と題して、破滅に至る、行ってはならない行為について述べられている。

「われらは破滅する人のことをゴータマ（ブッダ）におたずねします。破滅への門は何ですか？ 師にそれを聞こうとしてわれらはここにきたのですが、」

Parābhavantam purisaṃ mayam pucchāma
Gotamaṃ Bhagavantam puṭṭhum āgammah
kim parābhavato mukham.^{注5)}

これは、ブッダがサーヴァッティのジェータ林におられた時に、容色麗しい神が近づいて、敬礼し、詩を以て呼びかけたとされる場面で、語られているものである。

「悪い人々を愛し、善い人々を愛することなく、悪人のならいを楽しむ。これは破滅への門である。」

Asant' assa piyā honti, sante na kurute
piyam, asatam dhammam roceti, tam
parābhavato mukham.^{注6)}

ここでは、破滅の門として、悪人を愛し、善人を愛さず、悪人の有り様を楽しむことが挙げられている。

「睡眠の癖あり、集会の癖あり、奮励することなく、怠りなまけ、怒りっぽいので名だたる人がいる、これは破滅への門である。」

Niddāsīlī sabhāsīlī anuṭṭhātā ca yo
naro alaso kodhapaññāno, tam
parābhavato mukham.^{注7)}

ここでは、睡眠と集会の癖があり、奮励せず怠りな

まけ、怒りっぽいので名だたる人が、破滅の門とされている。

「みずからは豊かで楽に暮らしているのに、年老いて衰えた母や父を養わない人がいる、これは破滅への門である。」

Yo mātarāṃ vā pitarāṃ vā jīṇṇakam
gatayobbanam pahu santo na bharati
tam parābhavato mukham.^{注8)}

ここでは、裕福な者が、老いて衰えた父母を養わないことを破滅の門としている。

「バラモンまたは〈道の人〉または他の〈もので乞う人〉を、嘘をついてだますならば、これは破滅への門である。」

Yo brahmaṇam vā samaṇam vā aññaṃ
vā pi vaṇibbakam musāvādena vañceti,
tam parābhavato mukham.^{注9)}

ここでは、ヴェーダを信奉するバラモンとその他の宗教者たちに嘘をついてだますことが破滅の門としている。

「おびただしい富があり、黄金があり、食物ある人が、ひとりおいしいものを食べるならば、これは破滅への門である。」

Pahūtavitto puriso sahirañño
sabhojano eko bhujjati sādūni,
tam parābhavato mukham.^{注10)}

ここでは、裕福で、黄金も食べ物もある人が、一人だけで美味しいものを食べるのが破滅の門としている。

「血統を誇り、財産を誇り、また氏姓を誇って、しかも己が親戚を軽蔑する人がいる、——これは破滅への門である。」

Jātitthaddho dhanatthaddho
gottatthaddho ca naro saṃ nātīm
atimaññeti, tam parābhavato mukham.^{注11)}

ここでは、血統、財産、氏姓を誇り、しかも自分の親族を軽蔑することが破滅の門とされている。

「女性に溺れ、酒にひたり、賭博に耽り、得るにしたがって得たものをその度ごとに失う人がいる。これは破滅への門である。」

Itthidhutto surādhutto akkhadhutto
ca yo naro laddham laddham vināseti,
tam parābhavato mukham.^{注12)}

ここでは、女性や酒、賭博に夢中になり、身代を失うことが破滅の門とされている。

2. 「なまぐさ」と題する教え

また、SNでは「なまぐさ」と題して、カッサパ仏が、あるバラモンに説いた教えが語られている。

「梵天の親族（バラモン）である汝は、おいしく料理された鳥肉とともに米飯を味わって食べながら、しかも〈わたしはなまぐさものを許さない〉と称している。カッサパよ、わたくしはあなたにこの意味を尋ねます。あなたの言う〈なまぐさ〉とはどんなものなのですか。」

Na āmagandho mama kappati' ti icc — eva
tvam bhāsasi brahmabandhu sālinam

annaṃ paribhuñjamāno sakuntamaṃsehi
susamkhatehi, pucchāmi tam Kassapa
etam atthaṃ: kathappakāro tava
āmagandho. 注13)

ここでは、あるバラモンがカッサパ仏になまぐさの意味を問うという形で、話が始まり、人としてやってはならない行為が語られている。

「生物を殺すこと、打ち、切断し、縛ること、盗むこと、嘘をつくこと、詐欺、だますこと、邪曲を学習すること、他人の妻に親近すること——これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐさい〉のではない。」

Pāṇātipāto vadhachedabandhanaṃ theyyaṃ
musāvādo nikaṭi vañcanāni ca
ajjhenakujjaṃ parādārasevanā,
esāmagandho, na hi maṃsabhojanaṃ. 注14)

ここでは、生物を殺したり、虐待することがなまぐさであり、盗み、嘘、詐欺などの不法と思われる行為や、当時としての邪曲と思われるものを学習すること、他人の妻に近づき親しくすることがなまぐさとされている。肉食はなまぐさではないという文句はこのあとの詩句にも現れる。

「この世において欲望を制することなく、美味を貪り、不浄の（邪悪な）生活をまじえ、虚無論をいだし、不正の行いをなし、頑迷な人々、——これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐさい〉のではない。」

Ye idha kāmesu asaṅṅhātā janā rasesu
giddhā asucīkamissitā natthikaditṭhi
visamā durannaṣyā, esāmagandho, na hi
maṃsabhojanaṃ. 注15)

ここでは、欲望を制することなく、美味を貪り、不浄の邪悪な生活をまじえる人、虚無論をいだし、不正を為し、頑迷な人がなまぐさであるとされている。

「粗暴・残酷であって、陰口を言い、友を裏切り、無慈悲で、極めて傲慢であり、ものおしりする性で、なんびとにも与えない人々、——これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐさい〉のではない。」

Ye lūkhasā dāruṇā piṭṭhimamsika
mittadduno nikkaruṇatimānino
adānasīlā na ca denti kassaci, —
esāmagandho na hi maṃsabhojanaṃ. 注16)

ここでは、粗暴で残酷な人、陰口を言う人、友を裏切る人、無慈悲で、極めて傲慢で、ものおしりする性格で、誰にも施さない人がなまぐさとされている。

「怒り、驕り、強情、反抗心、偽り、嫉妬、ほら吹くこと、極端の高慢、不良の徒と交わること、——これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐさい〉のではない。」

Kodho mado thambho paccuṭṭhāpanā ca
māyā usuyyā bhassasamussayo ca
mānātimāno ca asabbhi santhavo,
esāmagandho na hi maṃsabhojanaṃ. 注17)

ここでは、一般的に見られる、いろいろななまぐさの性格が語られている。すなわち、怒り、驕り、強情、

反抗心、偽り、嫉妬がそれである。また、ほら吹くこと、極端の高慢、不良の徒と交わることもなまぐさとされている。

「この世で、性質が悪く、借金を踏み倒し、密告をし、法廷で偽証し、正義を装い、邪悪を犯すこの世における最も劣等な人々、——これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐさい〉のではない。」

Ye pāpasīlā iṇaghāta — sūcakā
vohārakūṭā idha pāṭirūpikā
narādhamā ye'dha karonti
kibbisam, — esāmagandho na hi
maṃsabhojanaṃ. 注18)

ここでは、最劣等の人々として、借金を踏み倒し、密告し、法廷で偽証し、正義を装い、邪悪を犯す人がなまぐさであるとされている。

「この世でほしいままに生きものを殺し、他人のものを奪って、かえってかれらを害しようと努め、たちが悪く、残酷で、粗暴で無礼な人々、——これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐさい〉のではない。」

Ye idha pāṇesu asaṅṅhātā janā
paresam ādāya vihesam uyyutā
dussīla — luddā pharusā anādarā
— esāmagandho na hi maṃsabhojanaṃ. 注19)

ここでは、ほしいままに殺生し、他人のものを奪って、かえってかれらを害しようと努め、たちが悪く残酷で、粗暴で無礼な人々が、なまぐさであるとされている。

「これら（生けるものども）に対して貪り求め、敵対して殺し、常に（悪事を）なすことにつとめる人々は、死んでからは暗黒に入り、頭を逆さまにして地獄に落ちる、——これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐさい〉のではない。」

Etesu giddhā viruddhātipātino
nicc'uyyutā, pecca tamaṃ vajanti ye,
patanti sattā nirayāṃ avamsirā,
— esāmagandho na hi maṃsabhojanaṃ. 注20)

ここでは、生けるものどもに対して貪り求め、敵対して殺し、常に悪事をなすことにつとめる人々がなまぐさとされている。さらに、これらの人々は死んでからは暗黒には入り、頭を逆さまにして地獄に落ちるとされる。

3. 「恥」と題する教説

さらに、SN では「恥」と題して、恥ずべき行為について述べられている。

「恥じることを忘れ、また嫌って、「われは（汝の）友である」と言いながら、しかも為し得る仕事を引き受けない人、——かれを「この人は（わが）友に非ず」と知るべきである。」

Hirin tarantaṃ vijigucchamaṇaṃ
sakhāham asmi iti bhāsamānaṃ
sayhāni kammaṇi anādiyantaṃ
n'eso maman'ti iti naṃ vijaññā. 注21)

ここでは、恥と題して、友人関係について述べられ

ている。友と称しながら、為し得る仕事を引き受けない人は友ではないと知るべきとされる。

「諸々の友人に対して、実行がともなわないのに、ことばだけ気に入ることを言う人は、「言うだけで実行しない人」であると、賢者は知りぬいている。」

Ananvayaṃ piyaṃ vācaṃ yo mittesu
pakubbati, akarontaṃ bhāsamānaṃ
parijānanti paṇḍitā.^{注22)}

ここでも友人関係について語られている。友人に対して、実行がともなわないのにことばだけ気に入ることを言う人は、言うだけで実行しない人であると、賢者たちは知り抜いているとされる。

「つねに注意して友誼の破れることを懸念して（旨いことを言い）、ただ友の欠点のみ見る人は、友ではない。子が母の胸にたよるように、その人にたよって、他人のためにその間を裂かれることのない人こそ、友である。」

Na so mitto yo sadā appamatto
bhedāsaṃkī randham evānupassī
yasmim ca seti urasīva putto,
sa ve mitto yo parehi abhejjo.^{注23)}

ここでは、友人関係が壊れることのみ懸念して、その欠点のみを見る人は友ではないとされる。子が母の胸にたよるようにその人にたよって、他人のためにその間を裂かれることのない人こそ、友であるとされる。

4. 「こよなき幸せ」と題する教説

また、尊き師（ブッダ）がサーヴァッティのジェータ林、孤独な人々に食を給する長者の園におられたとき、容色麗しい神の間に答えて、最上の幸福について次のように説いたとされる。

「多くの神々と人間とは、幸福を望みながら、幸せを思っています。最上の幸福を説いてください。」

Bahū devā manussā ca maṅgalāni acintayaṃ
ākamaṃkhamānā sothhānaṃ, brūhi maṅgalam
uttamaṃ.^{注24)}

ここでは、神の間に答えて、ブッダが最上の幸福について述べている。

「諸々の愚者に親しまないで、諸々の賢者に親しみ、尊敬すべき人々を尊敬すること——これがこよなき幸せである。」

Asevanā ca bālānaṃ paṇḍitānaṃ ca sevānā
pūjā ca pūjanīyānaṃ, etam maṅgalam
uttamaṃ.^{注25)}

ここでは、愚者に親しまず、賢者に親しむこと、尊敬すべき人々を尊ぶことが最上の幸福であるとされている。

「深い学識があり、技術を身につけ、身をつつしむことをよく学び、ことばがみごとであること——これがこよなき幸せである。」

Bāhusaccaṃ ca sippaṃ ca vinayo ca
susikkhito subhāsītā ca yā vācā, etam
maṅgalam uttamaṃ.^{注26)}

ここでは、深い学識があり、技術を身につけ、身を

つつしむことをよく学び、ことばがみごとであることが最上の幸福であるとされている。

「父母につかえること、妻子を愛し護ること、仕事に秩序あり混乱せぬこと、——これがこよなき幸せである。」

Mātāpitu — upatthānaṃ puttadārassa saṅgaho
anākulā ca kammantā, etam maṅgalam
uttamaṃ.^{注27)}

ここでは、父母につかえること、妻子を愛し護ること、仕事に秩序あり混乱せぬことが最上の幸福とされている。

「施与と、理法にかなった行いと、親族を愛し護ることと、非難を受けない行為、——これがこよなき幸せである。」

Dānaṃ ca dhammacariyā ca nātakānaṃ
ca saṅgaho anavajjāni kammāni, etam
maṅgalam uttamaṃ.^{注28)}

ここでは、施与と理法にかなった行為と親族を愛し護ることと、非難を受けない行為が最上の幸福とされている。

「悪をやめ、飲酒をつつしみ、徳行をゆるがせにしないこと、——これがこよなき幸せである。」

Ārati viratī pāpā majjapānā ca saññamo
appamādo ca dhammesu, etam maṅgalam
uttamaṃ.^{注29)}

ここでは、悪をやめ、飲酒をつつしみ、徳行をゆるがせにしないことが最上の幸福とされている。

「尊敬と謙遜と満足と感謝と（適当な）時に教えを聞くこと、——これがこよなき幸せである。」

Gāraṇaṃ ca nivāto ca santuṭṭhī ca
kataññutā kālena dhammasavanaṃ, etam
maṅgalam uttamaṃ.^{注30)}

ここでは、尊敬、謙遜、満足、感謝と適当な時に教えを聞くことが最上の幸福とされている。

「耐え忍ぶこと、ことばのやさしいこと、諸々の〈道の人〉に会うこと、適当な時に理法についての教えを聞くこと、——これがこよなき幸せである。」

Khantī ca sovacassatā samañānaṃ ca
dassanaṃ kālena dhammasācchā, etam
maṅgalam uttamaṃ.^{注31)}

ここでは、耐え忍ぶこと、ことばのやさしいこと、諸々の〈道の人〉に会うこと、適当な時に理法についての教えを聞くことが最上の幸福とされている。

「修養と、清らかな行いと、聖なる真理を見ること、安らぎ（ニルバーナ）を体得すること、——これがこよなき幸せである。」

Tapo ca brahmacariyā ca ariyasaccāna
dassanaṃ nibbānasacchikiriyaṃ ca etam
maṅgalam uttamaṃ.^{注32)}

ここでは、修養、清らかな行い、聖なる真理を見ること、安らぎを体得することが最上の幸福とされている。

「世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れを離れ、安穩であること、——これがこよなき幸せである。」

Phuṭṭhassa lokadhammehi cittaṃ yassa
na kampati asokaṃ virajam khemam, etaṃ
maṅgalam uttamam.^{注33)}

ここでは、世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れを離れ、安穩であることが最上の幸福とされている。

Ⅱ. チャラカ・サンヒターの人生観との比較考察

以前に考察した、SNに見られる人間観では、為すべきでない行為をする賤しき人として、他人の美德を覆い、誤った見解を奉じ、たくらみのある人や、他人を軽蔑し、ものおしみをし、恥じ入る心のない人が挙げられ、また、当時の印度社会を反映して、町を破壊する圧制者、村や林で盗みをする人、道行く人を殺害する物取り、さらに、修行者やブッダ、ブッダの弟子に嘘をついたり、罵ったり、そしめる人が説かれている。

また、慈しみを持つ人として、能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であることや、またその人が、足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であること、他の識者の非難を受けるような下劣な行いは決してしないこと、他人を欺かず、軽んぜず、苦痛を与えないことが挙げられている。

今回、取り上げた部分には、ブッダによって破滅にいたる、行ってはならない行為とされたものがある。すなわち、悪人を愛し、善人を愛さず、悪人の有り様を楽しむこと、そして、睡眠と集会の癖があり、奮励せず怠りなまけて、怒りっぽいことは破滅に至るとされる。また、裕福な者についての言及では、富裕なものが老いて衰えた父母を養わないことも、黄金も食べ物もあるのに、一人だけで美味しいものを食べることも、行ってはならない行為であり、また、血統、財産、氏姓を誇り、しかも自分の親族を軽蔑することや、女性や酒、賭博に夢中になり、身代を失うことは破滅に至る、行ってはならない、破滅に至る行為とされる。

また、ブッダではなくカッサパ仏が、「なまぐさ」と題して、あるバラモンに、為してはならない行為について説いている。すなわち、生物を殺したり、虐待すること、盗み、嘘、詐欺などの不法と思われる行為や、当時としての邪曲と思われるものを学習すること、他人の妻に親しく近づくことが為してはならないなまぐさな行為とされている。また、欲望を制することなく、美味を貪り、不浄の生活を混じる人、虚無論をいだし、不正を為し、頑迷な人、粗暴で残酷な人、陰口を言う人、友を裏切る人、無慈悲で、極めて傲慢で、ものおしりする性格で、誰にも施さない人が、なまぐさな、為してはならない行為をする人として挙げられている。

また、一般的な感情的な現れである、怒り、驕り、強情、反抗心、偽り、嫉妬も為すべきでない行為として挙げられている。また、ほら吹くこと、極度の高慢、不良の徒と交わることも、為すべきでないなまぐさな行為とされている。最劣等の人々として、借金を踏み倒し、密告し、法廷で偽証し、正義を装い、邪悪

を犯す人が挙げられている。これらは、犯罪といってもよいものである。

さらに悪い行為と思われるものとして、ほしいままに殺生し、他人からものを奪って、かえってかれらを害しようと努め、たちが悪く残酷で、粗暴で無礼な人々、生けるものどもに対して貪り求め、敵対して殺し、常に悪事をなすことにつとめる人々がなまぐさとされている。これらの人々は死んでからは暗黒に至り、頭を逆さまにして地獄に落ちると言う。

また、恥と題して、友人として為すべきでない行為が語られている。すなわち、友と称しながら、為し得る仕事を引き受けない人は友ではないと知るべきとされ、友人に対して、実行がともなわないのにことばだけ巧いことを言う人や言うだけで実行しない人は友ではないとされる。友人関係が壊れることのみ懸念して、その欠点のみを見る人は友ではないとされる。子が母の胸にたよるようにその人にたよって、他人のためにその間を裂かれることのない人こそ、友であると言う。ブッダは最上の幸福として、人の為すべき行為について言及している。すなわち、愚者に親しまず、賢者に親しむこと、尊敬すべき人々を尊敬することを挙げている。深い学識があり、技術を身につけ、身をつつしむことをよく学び、ことばがみごとであること、そして、家庭的には、父母につかえること、妻子を愛し護ること、社会的には、仕事に秩序あり混乱せぬことが最上の幸福だと言う。

また、施与と理法にかなった行為と親族を愛し護ることと、非難を受けない行為、悪をやめ、悪を離れ、飲酒をつつしむ、徳行をゆるがせにしないこと、尊敬、謙遜、満足、感謝と適当な時に教えを聞くことが最上の幸福とされる。

さらに、耐え忍ぶこと、ことばのやさしいこと、諸々の〈道の人〉、すなわち、宗教家に会うこと、適当な時に理法についての教えを聞くことが最上の幸福とされ、また、世俗の人々ではなく、俗世を離れた宗教家に対するものと思われるものとして、修養と清らかな行いと聖なる真理を見ること、安らぎを体得することや、世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れなく、安穩であることが最上の幸福とされる。

CSには、幸福な人生と不幸な人生、そして有益な人生と無益な人生についての言及の中に、人としてのあるべき姿が語られている。^{注34)} すなわち、幸福な人生とは、肉体的および精神的病気に冒されていない人、とりわけ、若々しさを保持している人、能力にふさわしい力と勇気と名誉と男らしさと大胆さをもっている人、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人、このような人に存在するとされる。これらとは反対の人々には不幸な人生があるとされる。^{注35)}

また、有益な人生とは、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、義務、財、愛からなる人生の三つの目的を互いに矛盾なく手に入れる人、尊敬に値する人を尊敬する人、知識と学

問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人に存在するとされる。また、これらの反対の人々の人生は無益であるとされる。^{注36)}

これらのCSに見られる言及の中で、幸福な人生を送る人の条件である、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人と、有益な人生の条件である、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人という内容は、SNの中で、愚者に親しまず、賢者に親しむこと、尊敬すべき人々を尊敬すること、博学と、技術と、訓練をよく学び、弁舌が巧みなことが最上の幸福であるとする部分と類似している。

SNでは、「なまぐさ」と題して、為してはならない行為として、生物を殺したり、虐待することは為すべきでない行為とされている。さらに、欲望を制することなく、美味を貪り、不浄の、邪悪な生活をまじえる人、虚無論をいだし、不正を為し、頑迷な人、粗暴で残酷な人、陰口を言う人、友を裏切る人、無慈悲で、極めて傲慢で、ものおしりする性格で、誰にも施さない人はなまぐさとされている。また、最上の幸福として、飲食を制し、徳行をゆるがせにしないこと、尊敬、謙遜、満足、感謝が挙げられている。

これらは、CSの中の、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人に有益な人生があるという考え方と類似している。

また、これまで考察して中では、SNの言及に見られないものとして、CSの中には、それぞれのカーストの人々のあり方について述べられる。すなわち、バラモンは一切衆生の救済のために、クシャトリアは自己を保護するために、ヴァイシャは生業のために、また、上位三カーストのすべての人は義務と財と愛を確保するためにアーユルヴェーダを学ぶべきであるとされる。^{注37)} また、これらの三カーストの人々のうち、最高我を知る人々、義務の道にいそしむ人々、義務を伝導する人々が、アーユルヴェーダ実践者であり、父母兄弟縁者、師匠などの病気を鎮静することに努力をし、アーユルヴェーダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとされる。^{注38)} 続けて、財、愛について説明される。まず、財とは、主君や長者からじきじきに、彼らの健康を守ったという理由で財貨が与えられたり、自分を保護してもらえ、あるいは自分に保護を求めてきた人々を病気から救済してやることであるとされる。そして、愛とは、有識者に認められているという名誉、他人から頼られること、評判がよいこと、自分の好きな人々と健康を分かち合うことであるとする。^{注39)}

さらに、CSでは良い医者と悪い医者についての言及が見られる。まず、悪い医者については、邪悪な医者という災厄は大混乱を生ずるものであり、穀物などを食い荒らすウズラの大群のようなもので、知らないうちに突然襲いかかってくると述べられている。邪悪な医者に対しては、その優劣を見分けるために、前置きの会話において、八つの質問を投げかけるべきとされる。また、良い医者の能力、すなわち、真に医学を知っているものの能力はその間においても発揮されると言う。^{注40)}

さらに、悪い医者に入れられる未熟な医者の様子について述べられる。すなわち、医学の体系全体の一部しか知らず、体系において能力のない連中は、ちょうどウズラが弓の弦の音を聞いただけで逃げ出すように、タントラという言葉の聞いただけで逃げていくと言われる。また、牛などの弱い動物たちのなかで、ある動物は仲間の連中が弱いので狼のごとくふるまうが、彼はほんとうの狼に近づくと本性をあらわすと言われる。^{注41)}

また、悪い医者は、おしゃべりという手段をもって、信頼されるような位置に自分の身を置いている無知な人もあるが、真に信頼される人に会うとおじけづいてしまうとされる。また、無知で学問のない医者というものは、ちょうど自分を大きく見せるために羊毛で身を覆った犬のようなものであり、優れた医者との対話においては何も言えなくなるとされる。^{注42)} また、無学であっても行いは実践者としては優れている医者に対しては、良い医者は議論で打ち負かしてはならず、むしろ、学問があるとうぬぼれているような連中を、最初に八つの質問によってやっつけるべきであるとされる。また、無知でうそつきで口先ばかりの連中はたいてい、脈絡のない無駄口を多く語るものであり、口数少なく誠実な人は、道筋の通ったことをほどほどに語るものであると言われる。^{注43)}

さらに、良い医者は医学知識をひろめるためには我欲を捨て、学問も知識も乏しいのに、おしゃべりを常とするような論者どもを容赦してはならないとされる。また、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつぱら向けられると言われる。^{注44)}

医者の中で、誤った学説や質問されると今は時機ではないとか身体の具合が悪いのでと逃げ口上を言うことや、うそやこけおどしを方便とし、他人を中傷する人は、たいてい自身の学問において未熟であるとされる。また、このような学問を汚す連中は死神の罠に等しいものであるからさけるべきであり、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであると言われる。あらゆる不幸は、無知に基づき、あらゆる幸福は汚れのない知恵に基づいていると言われる。^{注45)}

このような良い医者と悪い医者についての言及は、SNには見られないものであるが、バラモンの理想として、聖典の語の区切りを知り、文法に通じ、世俗哲学に通じ、偉人のもつ特徴を完全に知っている者であることが挙げられているので、冷静さと知恵と学問に

満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであるとするCSの言及と矛盾しない。

結 論

CSとSNの言及を比較検討すると、CSに見られる言及の中で、幸福な人生を送る人の条件である、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人ということや、有益な人生の条件である、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、記憶力と思慮にたけた人であることなどは、SNの中で、愚者に親しまず、賢者に親しむこと、尊敬すべき人々尊敬すること、博学と、技術と、訓練をよく学び、弁舌が巧みなことが最上の幸福であるとする部分と類似している。

また、CSの中の、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人に有益な人生があるとしている。

一方SNでは、生物を殺したり、虐待することは為すべき行為ではないとし、また、欲望を制することなく、美味を貪り、不浄の生活を混じる人、虚無論をいだし、不正を為し、頑迷な人、粗暴で残酷な人、陰口を言う人、友を裏切る人、無慈悲で、極めて傲慢で、ものおしりする性格で、誰にも施さない人はなまぐさとされている。また、最上の幸福として、飲食を制し、徳行をゆるがせにしないこと、尊敬、謙遜、満足、感謝が挙げられているが、これらは、上記のCSの内容と類似している。

SNには、最上の幸福についての言及の中で、出家者、俗世を離れた宗教家に対するものと思われるものとして、修養と清らかな行いと聖なる真理を見ること、安らぎを証することや、世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れなく、安穩であることが説かれている。CSにある医者そのものについての言及は、SNには見られないものであるが、SNの人としてのあるべき姿、人間観は、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであるとするCSの言及と矛盾せず、その流れている人間観には共通のものが見られる。

摘 要

CSに見られる言及の中で、幸福な人生を送る人の条件と有益な人生の条件に見られる内容は、SNの人としてあるべき姿、その人間観と類似している。しかし、SNに見られる出家者、俗世を離れた宗教家に対するものと思われる、修養と清らかな行いと聖なる真理を見ること、世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺しないこと等の言及はCSには見られない。また、CSにある良い医者と悪い医者についての言及

は、SNには見られないものである。しかし、SNの人としてのあるべき姿、人間観は、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであるとするCSの言及と矛盾せず、両者の底流に流れている人間観には共通のものが見られる。

注 記

- 1) Sutta-Nipāta (以下 SN). ed. by D. Andersen and H. Smith (Pali Text Society) Oxford 1997.
- 2) Carakasamhitā (以下 SS) ed. by V. Bh. Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies, Varanasi 1988. VOL. XCIV. 矢野道雄『インド医学概論』(科学の名著第Ⅱ期)昭和63年朝日出版。長友泰潤「チャラカ・サンヒターのプラーナ説」論集(印宗学会)第38号 pp.37-46. 2012.
- 3) 長友泰潤「原始仏典に見る人間観」南九州大学研究報告44B 2014 pp.21-22.
- 4) 長友上掲論文 p.22.
- 5) SN p.18 II.15-17 中村元『ブツダのことば』岩波書店 2014 p.29参照。村上・及川『仏のことば註』(一)春秋社 1986 p.407参照。parābhavaの訳として、生活破綻、人生の敗北も考えられる。村上・及川『パーリ仏教辞典』p.1190参照。
- 6) SN p.18 II.24-26. 中村上掲書 p.29参照。村上・及川上掲書 p.411参照。
- 7) SN p.19 II.1-2. 中村上掲書 p.29参照。村上・及川上掲書 p.412参照。kodhapaññaには憤懣を標識としている、怒りを顕す人という訳も考えられる。村上・及川上掲辞典 p.563参照。
- 8) SN p.19 II.6-7. 中村上掲書 p.29参照。村上・及川上掲書 p.414参照。母や父が、老いて盛りをすぎたのを、できるのに養わない者、という訳も考えられる。村上・及川上掲辞典 p.596参照。
- 9) SN p.19 II.11-13. 中村上掲書 p.30参照。村上・及川上掲書 p.415参照。samaṇaは仏教の修行者、バラモンではない宗教家も意味し、沙門と訳されることが多い。村上・及川上掲辞典 pp.1942-1943参照。
- 10) SN p.19 II.17-18. 中村上掲書 p.30参照。村上・及川上掲書 p.417参照。gottaはgotraを意味し、同じgotta間の男女の結婚は禁じられている。村上・及川上掲辞典 p.630参照。
- 11) SN p.19 II.29-31. 中村上掲書 p.30参照。村上・及川上掲書 p.418参照。itthidhuttaは女性ぐるいを意味し、女性にうつつをぬかし、何でも有るものを与えて、次々と女性を手に入れることである。村上・及川上掲辞典 p.311参照。
- 12) SN p.43 II.3-8. 中村上掲書 p.54参照。村上・及

- 川上掲書 (二) p.333 参照。
- 14) SN p.43 II.8-11. 中村上掲書 p.54 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.334 参照. *ajjhenakujja* は学問曲がりのことで, 無用で, 無意味なことを生み出す典籍を学習することを意味する. 村上・及川上掲辞典 p.538 参照.
- 15) SN p.43 II.12-15. 中村上掲書 p.54-55 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.336 参照. *natthika* とは虚無論を意味し, 「布施はない」などの邪見をいざくことを指す. 村上・及川上掲辞典 p.972 参照.
- 16) SN p.43 II.16-19. 中村上掲書 p.55 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.338 参照. *nikkaruṇatimānin* とは, あわれみがなく極めて高慢なことを意味する. 村上・及川上掲辞典 p.999 参照.
- 17) SN p.44 II.1-4. 中村上掲書 p.55 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.339 参照.
- 18) SN p.44 II.5-8. 中村上掲書 p.55 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.341 参照. *narādhamā* とは, 最下劣な人という意味で, 父母や仏に対して間違っただ行いを為すことである. 村上・及川上掲辞典 p.980 参照.
- 19) SN p.44 II.9-12. 中村上掲書 p.55 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.342-343 参照. *anādara* とは思慮のないことを意味し, 敬意のないことを指す. 村上・及川上掲辞典 p.96 参照.
- 20) SN p.44 II.10-13. 中村上掲書 p.55 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.344 参照.
- 21) SN p.45 II.15-18. 中村上掲書 p.56 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.364 参照.
- 22) SN p.45 II.19-20. 中村上掲書 p.56-57 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.365 参照.
- 23) SN p.46 II.1-4. 中村上掲書 p.57 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.366 参照.
- 24) SN p.46 II.19-21. 中村上掲書 p.57 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.390 参照.
- 25) SN p.46 II.22-23. 中村上掲書 p.58 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.392 参照.
- 26) SN p.47 II.1-2. 中村上掲書 p.58 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.407 参照. *sippa* は技芸, 技, 職業を意味する. 博識と技芸という形で使われる. 村上・及川上掲辞典 p.2044 参照.
- 27) SN p.47 II.3-4. 中村上掲書 p.58 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.411 参照.
- 28) SN p.47 II.5-7. 中村上掲書 p.58 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.416 参照.
- 29) SN p.47 II.8-9. 中村上掲書 p.58 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.419 参照. *appamāda* は不放免と訳されることが多い. 村上・及川上掲辞典 p.160 参照.
- 30) SN p.47 II.10-11. 中村上掲書 p.58 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.422 参照. *kataññutā* とは, 恩をしること, 知恩と訳される語である. 村上・及川上掲辞典 p.456 参照.
- 31) SN p.47 II.12-13. 中村上掲書 p.58 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.429 参照.
- 32) SN p.47 II.14-15. 中村上掲書 p.58-59 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.434 参照.
- 33) SN p.47 II.16-18. 中村上掲書 p.59 参照. 村上・及川上掲書 (二) p.436 参照.
- 34) CS. Vol.I.p.598, II.4-7. 矢野上掲書 p.232 参照.
- 35) CS. Vol.I.p.599, II.23-27. 矢野上掲書 p.232 参照.
- 36) CS. Vol.I.p.599, II.27-31. 矢野上掲書 p.232 参照.
- 37) CS. Vol.I.p.603, II.29. 矢野上掲書 p.234 参照.
- 38) CS. Vol.I.p.603, II.29-33. 矢野上掲書 p.234 参照.
- 39) CS. Vol.I.p.603, II.33-36. 矢野上掲書 p.234-235 参照.
- 40) CS. Vol.I.p.615, II.21-24. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 41) CS. Vol.I.p.615, II.25-26. p.616, II.7-8. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 42) CS. Vol.I.p.616, II.9-12. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 43) CS. Vol.I.p.616, II.13-16. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 44) CS. Vol.I.p.616, II.17-20. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 45) CS. Vol.I.p.617, II.17-20. 矢野上掲書 p.239 参照.